

Hou・シャオシェンの レッド・バルーン

2008(平成20)年7月10日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督・脚本=侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}/出演=ジュリエット・ピノシュ/イポリット・ジラルド/シモン・イテアニュー/ソン・ファン/ルイズ・マルゴラン (カフェグルーヴ、クレストインターナショナル配給/2007年フランス映画/113分)

……この映画は、1956年のカンヌ国際映画祭パルムドール賞を受賞したフランス人監督アルベール・ラモリスの36分の短編『赤い風船』に、台湾の巨匠侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}がオマージュを捧げたもの。したがって、この映画を観るについては『赤い風船』と侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}監督について勉強し、その知識を習得することが大前提！ 安易なお気楽映画でうさ晴らしをするのも悪くはないが、たまにはみっちりとなんな勉強をして、これぞホンモノという映画を味わってみては……？

なぜ、こんなタイトルが？

“レッド・バルーン”は1956年にアルベール・ラモリス監督がつくった『赤い風船』と全く同じタイトルだが、今回はそこに“ホウ・シャオシェンの”という形容詞(?)がついている。しかして、この「侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}」を知っている人は……？ 知らない人は……？

2007年に大ヒットした『HERO』や『恋空』、そして2008年の今大ヒットしている『花より男子ファイナル』など、マスコミの大量宣伝に踊らされている傾向が強い20代、30代の若者は9割以上が「侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}」を知らないはず。逆に、50代、60代の人々は『悲情城市』(89年)の侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}と言えば、映画好きな人の5割以上はわかるのでは……？ そう、この映画は1947年生まれの台湾の巨匠侯孝賢^{ホウ・シャオシェン}監督が、アルベール・ラモリス監督の『赤い風船』へのオマージュを捧げた映画であり、2007年カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門に出品された映画なのだ。

まずは前提知識の勉強から

私は去る6月12日、1970年に48歳で亡くなったフランス人の映画監督アルベール・ラモリスが1956年につくり、カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した36分の短編『赤い風船』を観た。これは、1953年のカンヌ国際映画祭でグランプリに輝いた同監督の40分のモノクロの短編『白い馬』とともに上映されたものだが、そのすばらしさに圧倒された。そのプレスシートには、「何度観ても色あせない感動。『赤い風船』は奇跡の映画と呼んでも過言ではない」と解説されていたが、それが決して誇張ではないことを実感！

『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』を観るについて、まずはこの前提知識が必要不可欠。映画の面白さや楽しさをホントに味わうためには、きちんと勉強することが必要なのだ！

なぜ、今こんな映画が？

なぜ、今こんな映画が……？ プレスシートによれば、それは2007年にオルセー美術館の開館20周年事業として、美術館が映画製作に全面協力するというプロジェクトが発足し、その栄えある第1回作品の監督に侯 孝 賢^{ホウ・シャオシェン}が指名されたため。

この映画を味わうためにはそんな前提についても勉強しなければならないが、それにしてもフランスのバスティーユ駅前、リュクサンブール公園、オルセー美術館等が登場し、フランス人監督アルベール・ラモリスの『赤い風船』へのオマージュを捧げるこの映画の監督として、台湾の侯 孝 賢^{ホウ・シャオシェン}が指名されたのは、一体なぜ……？ 日本には「世界のキタノ」をはじめとしてたくさんの人材がいるはずだが、やはり彼らは侯 孝 賢^{ホウ・シャオシェン}監督には到底及ばないと評価されているの……？

なるほど、こういう形でオマージュを！

少年パスカルを主人公とし、パスカルと赤い風船との仲を描いた(?)アルベール・ラモリス監督の『赤い風船』は36分のホントにシンプルな短編映画。ところが、『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』は113分の長編だから、当然それなりの登場人物とストーリー展開があるはずで、少年が「赤い風船」を追っかけるだけの映画ではないはず。しかしそうすると、長編映画としてのストーリーと、アルベール・ラ

モリス監督の『赤い風船』へのオマージュをどうやって両立させるの……？

この映画を観る前、私は勝手にそんな心配(?)をしていたが、それが要らざる心配であったことが開始早々明らかに。さて、侯孝賢監督ホウ・シャオシェンのそんな手腕とは……？それは映画の冒頭、7歳の少年シモン(シモン・イテアニユ)がバスティーユ駅で見つけた赤い風船の扱い方を見ればすぐにわかるが、それはここでは明かさないう方が……？

やはり、あのフランスを代表する女優が

2001年に映画評論を書き始めて以降、フランスを代表する女優として私の頭の中にインプットされたのが、『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)、『ショコラ』(00年)、『シェフと素顔と、おいしい時間』(02年)、『綴り字のシーズン』(05年)、『こわれゆく世界の中で』(06年)、オムニバス映画『パリ、ジュテーム』(06年)の諏訪敦彦監督篇『ヴィクトワール広場』等に出演していたジュリエット・ピノシュ。侯孝賢監督ホウ・シャオシェンが『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』の主役として白羽の矢を立てたのはそんなジュリエット・ピノシュだった。

スザンヌの仕事は？ なぜ、情緒不安定に？

ジュリエット・ピノシュが演ずるのはシモンの母親スザンヌ役で、彼女の仕事は人形劇師。この「人形劇師」というのが、いかにも侯孝賢流ホウ・シャオシェン。アンヌ・フォンテーヌ監督マギー・チャン、張曼玉主演の『オーギュスタン／恋々風塵』(99年)では、フランスの中華街が描かれていたが、フランス人が中国の人形劇師を演ずるというのは、いくら名優ジュリエット・ピノシュでも大変。しかし、あるシーンでジュリエット・ピノシュは見事にそれを演じていたから、一流のプロ女優はすごいもの。

もともと、全体のストーリー構成としては、ジュリエット・ピノシュ演ずるスザンヌは、こんな事情、あんな事情で少し情緒不安定になっているシーンが多いから、それを演ずるのはお手のもの……？ ①友人のマルク(イポリット・ジラルド)に貸している部屋にまつわるトラブルや、②父親違いの娘ルイーザ(ルイーザ・マルゴラン)との行き違い、さらに③長らく音信不通となっていた夫からかかってきた電話に対する怒りなど、演技力抜群のジュリエット・ピノシュが、実にいろいろな表情を見せてくれるから、それをお楽しみに。

中国人留学生にも注目！

私は2000年以降、中国人留学生との接点がメチャ多くなっているが、新作劇の発表準備に忙しいスザンヌが一人息子シモンのベビーシッター役を依頼したのが、中国人留学生の女性ソン（ソン・ファン）。プレスシートを読んで面白いと思ったのは、

侯孝賢監督がアジア映画

大学の学長をしていた時の生徒の1人であったソン・ファンは、ブリュッセルとパリで

数年過ごしたことがあり、その後北京の映画大学で学んでいるため、^{ホウ・シャオシェン}侯孝賢監督はソン・ファン演ずるソンを映画を学ぶ学生と設定したこと。

そのため映画の冒頭、シモンを学校まで迎えにいったソンが、アルベール・ラモリス監督の『赤い風船』の舞台となった町並みを歩きながら、シモンと『赤い風船』の話をしながら歩くシーンが、全然違和感なく理解できることになる。さらに、今ソンはシモンを主役にして映画『赤い風船』の撮影にとりかかっているらしいから、その完成が楽しみ……。

さらに、ソンが住む古いアパートマンの部屋の中でスザンヌが発見した古い8 mmフィルムを「DVDに変換できるの？」と頼めるのは、ソンが映画学生だから。もちろん、それはきわめて簡単なこと。さあ、ソンが8 mmから変換したDVDをみんなで観ていると、そこに映っているのはシモンの姉のルイーゼと、人形劇師のひいおじいさんの姿。そんな懐かしい映像に心を安らげるスザンヌだったが……。

弁護士として注目すべき法律問題も……

『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』の鑑賞には直接関係ないが、スザンヌ



© 3H PRODUCTIONS-MARGO FILMS-LES FILMS DU
LENDEMAIN-ARTE France Cinema

DVD『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』発売日：
2008年12月12日、発売元：角川エンタテインメント

が頭を悩ませ情緒不安定になっている原因の1つは、日本でもフランスでも共通の賃貸建物（部屋）をめぐるあるトラブル。つまり、スザンヌとシモンの母子が住むのは古いアパートマンの最上階だが、その階下のピアノの置いてある部屋を友人のマルクに賃貸していたところ、マルクが賃料の支払を滞納するという事態になったわけだ。しかも、友人であることに甘えたマルクが、ある日スザンヌの部屋のキッチンを手勝手に使っていることを知ったからスザンヌはこれに激怒。そこで家賃滞納を理由として賃貸借契約を解除し、マルクを部屋から追い出そうとしたのだが、そのためにはどんな手続が……？

もちろん、そのためには賃貸借契約書が必要だが、なかなかそれが出てこないからスザンヌはイライラ。もっとも、日本では賃借人が居直れば裁判を提起して、判決を得て、明渡しの強制執行をするまでに最悪2、3年はかかるうえ、賃借人が無一文であれば滞納賃料の回収は事実上不可能。そんな弁護士としての私が知っている日本の現実に比べれば、スザンヌとマルクが激しく言い争いをするシーンが登場するものの、マルクの部屋にあったピアノを階下から運んでいる状況になったということは、無事明渡し完了したはず……？ 弁護士も入れないで、また裁判もやらないで無事明渡し事件が解決できたことを、スザンヌと共に喜びたい。

長編映画のラストシーンは……？

前述のとおり、この映画はオルセー美術館の開館20周年事業として侯 孝 賢^{ホウ・シャオシェン}監督が製作したものだから、どこかにオルセー美術館のコマーシャルを入れるのは暗黙の約束ゴト……？ そんなことはないと思うが、侯 孝 賢^{ホウ・シャオシェン}がこの映画のラストに設定したのは、シモンたちが学芸員に連れられてオルセー美術館で絵画鑑賞をするシーン。

そこで登場するのが、ヴァロトンの油彩『ボール』だが、残念ながら私はこの絵をよく知らなかったため、映画鑑賞後少しお勉強。それはともかく、子供たちがこの『ボール』についてさまざまな意見を述べている時、ふと天井を見上げたシモンが天窓の向こうに見たものは……？ このラストシーンは、まさにアルベール・ラモリス監督の『赤い風船』と同じテイスト。このラストシーンに、侯 孝 賢^{ホウ・シャオシェン}監督のアルベール・ラモリス監督の『赤い風船』に対する最大のおマージュが……。

2008(平成20)年7月14日記